

成医会における William Willis の特別講義

明治14年(1881)11月16日の第35回成医会例会において、高木兼寛の恩師 William Willis (英医, 1837-1894) は同会の名誉会員に推されている¹⁾²⁾。そして次々回の第37回成医会例会(12月7日)において「コレラ病論」なる特別講義を行っている³⁾。場所はいつもの成医会会場の東京医学会社(京橋区槍屋町11番地, 現・中央区銀座4丁目)であった。聴衆は高木兼寛会長を始めとする松山棟庵, 隈川宗悦, 田代基徳, 新宮涼園らの会員約40名であったと想像される。この講義において Willis はコレラについての疫学から症状, 病理, 治療にいたるまでの詳細な見解を述べている(成医会月報の30頁にわたる膨大なものである)。今日の我々からみても格調の高いものであり, 医学史料としても貴重なものである。

しかし, 筆者がここに試みたいことは, その講義内容を論評することではなくて, (今まで注目されることのなかった) この貴重な史実に対して筆者なりの史的考察を加えてみることである。より具体的にいうなら, Willis の人生の中でこの史実とは一体何であったのかをここで考えてみたいのである。

Willis は実は名誉会員に推挙される成医会例会の直前に来日している。そしてこの来日は, 西南戦争のために急きょ帰(英)国(明治10年(1877)7月)してから4年目の待望久しいものであった。何かを期待して訪ねて



William Willis
(1837-1894)

きたはずである。にもかかわらず、この成医学会での講義を終えると直ぐ（明治14年（1882）1月）帰国している。来日してからわずか2カ月の慌ただしきであった。しかも、深い失望とともに帰国したと伝えられている⁴³⁾。何故であろうか。

ここでもう一度 Willis の日本における履歴、生活を考えることにする。戊辰戦争時の医療功績によって一度は医学校兼病院（東大医学部の前身）の院長に就任したものの、そこでは以後ドイツ医学を導入することになったため、鹿児島医学校（鹿児島大医学部の前身）に去ったことはよく知られている。西郷隆盛の推薦や石神良策の奔走によってようやく同校（校長）に赴任したのであった。しかし、動機はどうであったにしろ、この赴任（明治3年（1870）1月）に始まり西南戦争によって終わる7年間の鹿児島での生活は、Willis の生涯にとって最も楽しく最も充実したものであった。高木兼寛、三田村一を始めとする多くの優れた門下生を輩出したし、また個人生活でも、赴任の翌年（1871）江夏八重と結婚し、同7年（1874）には愛児アルバートをもうけている。また同8年（1875）には、鹿児島県令からサバティカル休暇の許可をえて約1年間母国に遊んでもいる（この時、高木はすでにロンドンのセント・トーマス病院医学校に留学していたため、彼はこの愛弟子に会えることを最高の楽しみにしていたという⁴⁴⁾）。とにかく鹿児島での生活は幸せであった。にもかかわらず、この生活が8年目に入ろうとする明治10年（1877）2月、彼が最も親しくしていた西郷が内乱（西南戦争）の先頭に立ったため、これが日本滞在の終幕となってしまった。彼は八重とアルバートを残し、絶望的な思いで単身帰国した（明治10年（1877）7月）。

Willis が失意のどん底で生活を始めたとき、同じ英国で高木は着々と医学の勉強を続けていた。高木の帰国は明治13年（1880）11月であるから、二人は3年間同じ英国で生活していたことになる。Willis はロンドンから200キロばかり離れたモンマス（という町）に住んでいたから、二人は時々会うことはできた筈である（ただこのことについての史料は何も残っていない）。Willis は日本に残してきた八重とアルバートのことが片時も忘れられなかったらしい⁴⁵⁾。高木から帰国後の計画を聞かされるにつけ、自分も再度日本を訪

ね、今度は東京で、何とか医師として父として夫として意義のある生活を始めたいと思ったに違いない。高木が帰国後成医会や同講習所を設立したと伝え聞くと、矢も楯もたまらず訪日したのではないだろうか。

Willis は横浜に着くとすぐ成医会を訪ねている。そしてその後の結末は上にみた通りである。なにか不愉快なことがあったに違いない。筆者がここで推察できるのは、その時 Willis が東京で見聞した医学界の状況が、それまで想像していたものとはあまりにも違っていたことである。東京ではすでにドイツ医学が全盛をきわめ、英医 Willis を収める場所ももう何処にもなかったのではないだろうか。また、彼の西郷びいき薩摩びいきは有名であったから、このことが就職の障害になったことも否めない⁵⁾。それに彼はもう年をとりすぎていた(まだ 45 歳であったが、当時の年齢感覚ではもう老年であった)。英国医学を標榜し、Willis に最大の敬意を表していた成医会にしても、その潜在力と理想は高かったにしろ、まだ結成して 10 カ月ばかりであり、Willis を受け入れるだけの力はまだなかったのではないだろうか。Willis は、日本にはもう自分を評価してくれる場所が何処にもないことを知って深く失望したに違いない。彼は愛息アルバート(当時 7 歳)を連れて急いで帰国したのではないだろうか。

成医会での講義とこれに続くあわただしい帰国の背景には、このような、Willis にとって抜き差しならない事情があったのではないかと思うのである。

(これから後は余談である)⁴⁾ Willis の子息アルバートはその後、バックスター家の世話になり、オーストラリアに渡っている。彼は明治 38 年(1905)偶然のことから、母・八重の消息を知り、翌 39 年 3 月、横浜で再会している。八重は Willis と別れてからいろいろなことがあり、高田馬場付近で零落した日々を送っていたが、ある日突然アルバートからの手紙を受けとって夢かと思いに驚いた。24 年ぶりの再会であった(アルバートはすでに 31 歳、八重は 56 歳になっていた)。翌 40 年 8 月、二人は 30 年ぶりに鹿児島を訪れ、Willis の門下生たちの熱い歓迎をうけた。アルバートはその後日本に定住し、関西大学をはじめ数校の英語の教師をつとめた。昭和 16 年(1941)日本に帰

化したが、その2年後、第二次大戦の最中に死去した(享年69歳)、八重はすでに昭和8年に麻布で没している(享年83歳)。高木兼寛と彼らとの間にどのような交際があったのかは知られていない。Willisは、すでに明治27年(2月14日)、生地の北アイルランドの兄の家で亡くなっていた。57歳であった。

文 献

- 1) 成医会編集部: 成医会記事—11月16日, この日ウィリアム・ウィリス氏を名誉会員に列す。成医会月報1号: 40, 1881.
- 2) 成医会編集部: 会員姓名録—名誉会員 英国公使館 ウィリアム・ウィリス。成医会月報1号: 46, 1881.
- 3) ドクトル ウィリス 口述。片倉寿繁筆記: 虎列刺病論。成医会月報2号: 21-33, 1881.
ドクトル ウィリス 口述。山本義夫筆記: 虎列刺病論(続)。成医会月報3号: 1-18, 1881.
- 4) ヒュウ・コータツツイ, 中須賀哲朗訳: ある英人医師の幕末維新—W. ウィリスの生涯。中央公論社, 東京, 1985.
- 5) 萩原延寿: 遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄I。朝日新聞社, 東京, 1986.